

授受構文における否定性・アスペクト性の「浸透現象」

澤田 淳

【キーワード】 受益構文、否定、アスペクト、浸透現象、透明性

0. 本稿の目的

本稿の目的は、(i)「～てくれない」の「ない」が表す否定性、(ii)「～てくれている」の「ている」が表すアスペクト性は、「～てくれる」に留まることなく、「～てくれる」が包み込む事象の内部にも浸透するという特異な現象を、(認知)意味論的観点から説明を試みることである。本稿は、以下のように構成されている。第1節では、否定性の浸透現象についての、第2節では、アスペクト性の浸透現象についての観察を行う。第3節では、これらの観察を原理的に説明するために、「浸透性の仮説」を提出する。第4節は、まとめと今後の課題である。

1. 「～てくれない」における否定性の浸透現象

1.1. 先行研究における分析法

受益構文と否定との関わりについて論じた研究に、寺村(1979)がある。寺村(1979: 212)は、「てくれる+ない」を「外の否定」(=「ムードの否定」)、「ない+てくれる」を「内の否定」(=「コトの否定」)と分析した。

(1) a. トメテクレルナ、オッカサン。

b. トメナイデクレ、オッカサン。(寺村 1979: 212)

寺村(1979: 212)によれば、(1a)の否定辞「ない」は、補助動詞「～てくれる」を否定した「外の否定」であり、(1b)の否定辞「ない」は、本動詞「とめる」を否定した「内の否定」である。寺村(1979)は、受益構文と否定の関係に関して、次のように一般化している。

(2) 利益の授受行為自体についての否定は補助動詞の外側の否定となり、授受の内容である行為の作為・不作為は内側の、つまり前の動詞の否定形となる(寺村 1979: 212)。

このように、寺村(1979)は、「～てくれない」の「ない」は「～てくれる」を、「～ないでくれる」の「ない」は事象(寺村のいう「コト」)を、否定すると分析している。

1.2. 本稿における分析法

はじめに、次の例の a と b を比較されたい。

(3) a. ここ最近、雨が降ってくれない。

b. ここ最近、雨が降らないでくれる。

寺村(1979)の分析に従えば、否定辞「ない」は、(3a)では「～てくれる」を、(3b)では事象(雨が降る)を否定していることになる。確かに、統語論的には、(3a)の「ない」は、「～てくれる」だけを否定している。しかしながら、意味論的には、(3a)の「ない」は、「～てくれる」だけではなく、事象(=雨が降る)をも否定していると解釈されなければならない。以下、「～てくれない」の否定辞「ない」が事象をも否定しているとみなすべき論拠を3点挙げる。

第1に、次の例を考えてみよう。

(4)*花子は明日まで出発するそうだ。

(4)は不適格である。なぜなら、一般に、「～まで」は、「継続性を前提とした範囲の限定」(森田 1989: 1072)を表すが、「出発する」は、「継続性」を持たない動詞であるからである⁽¹⁾。一方、次の(5)は適格である。なぜなら、「出発しない」という否定形式は、「継続性」を有するからである。

(5)花子は明日まで出発しないそうだ。

以上の考察を踏まえて、次の「～てくれない」の例を考えてみよう。

(6)花子は明日まで出発してくれないそうだ。

(6)では、事象(=花子が明日まで出発する)も否定されていると分析しなければならない。なぜなら、もし事象が否定されていないと分析するならば、「～まで」が事象内部に生起している理由が説明できないからである。

第2に、次の例を比較されたい。

(7)*雨が降ってくれなかったのに、降ってしまった。

(8)雨が降ってほしくなかったのに、降ってしまった。

(8)とは異なり、(7)は、従属節(=ノニ節)と主節の意味内容が矛盾するため、不適格である。すなわち、(7)では、従属節は「雨が降らなかった」ことを述べているのに対し、主節は「雨が降った」ことを述べているのである。このことは、「～てくれない」の「ない」は、「～てほしくない」の「ない」とは異なり、事象(雨が降った)を否定していることを示している。

第3に、次の例を比較してみよう。

(9)ちっとも雨が降ってくれない。

(10)ちっとも雨が降ってほしくない。

否定の陳述副詞「ちっとも」は、(9)では、「降らない」と呼応しているのに対し、(10)では、「～てほしくない」と呼応していると分析される。換言すれば、「～てくれない」の「ない」は、「～てほしくない」の「ない」とは異なり、事象(=雨が降る)をも否定しているのである⁽²⁾。

以上 3 点の論拠から、「～てくれない」の否定辞「ない」は、「～てくれる」だけではなく、事象も否定していると結論される。

1.3. 「～てくれない」の否定現象と「否定辞繰り上げ」現象の共通点と相違点

はじめに、次の例を見てみよう。

(11) I don't think [John will leave until tomorrow]. (太田 1980:515)
 (11)は、いわゆる「否定辞繰り上げ」(NEG-raising)現象の例である。本節では、「否定辞繰り上げ」現象と「～てくれない」の否定現象の共通点と相違点について考えてみたい。はじめに共通点について考えてみよう。

第 1 の共通点は、両現象とも、事象が否定されているという点である。例えば(11)では、否定辞 “not” は、統語論的には、動詞 “think” を否定しているが、意味論的には、補文の事象 (“John will leave”) を否定していると解釈される(このことは、補文の事象内部に “until” が生起している点からも証明される)(太田 1980:516)。したがって、(11)は、次の(12)とほぼ同義であるとされる。

(12) I think [John won't leave until tomorrow]. (太田 1980:515)

第 2 の共通点は、「否定辞繰り上げ」動詞と「～てくれる」が共有する意味的な性質である。これまでの研究で、「否定辞繰り上げ」を許す動詞は、think や believe をはじめとする認識動詞(epistemic verbs)の一群に限られることが明らかにされてきた(太田 1980:520, Horn 2001:324 等参照)⁽⁹⁾。一方、「～てくれる」も、事象に対する認知主体 (conceptualizer) の恩恵的な心的態度を表しているという点で、認識的な意味を有している(詳しくは、Masuoka 1981、澤田 2003 等参照)。

しかしながら、両現象には、決定的な相違点がある。それは、意味論的に見た場合、「否定辞繰り上げ」現象では、動詞((11)では、“think”)自体は否定されないのに対し、「～てくれない」の否定現象では、「～てくれる」自体も否定されるという点である。この相違は、概略、以下のように表される(NEG は否定辞、V は(13)では動詞(例えば“think”)、(14)では「～てくれる」、P は事象、点線矢印は否定の働きの方向性を表す)。

(13) 「否定辞繰り上げ」現象：

NEG	V	[P]
			↑	

(14) 「～てくれない」の否定現象：

[P]	V	NEG
	↑		↑	

(13)、(14)の図式から、(11)は(12)と同義であるのに対し、次の(15)は(16)と同義ではないことが明らかとなる。

(15) 花子は明日まで出発してくれない。

(16) 花子は明日まで出発しないでくれる。

1.4. 「～てくれない」と「～ないでくれる」の相違点

本節では、「～てくれない」と「～ないでくれる」の相違点を、4つの観点から例証してみたい。

第1に、次の例のaとbを比較されたい。

(17) a. 山田が口を割ってくれない。

b. 山田が口を割らないでくれる。

(17a)の「ない」は、「～てくれる」と事象(山田が口を割る)の両方を否定している。すなわち、(17a)では、「山田が口を割らない」ことが恩恵的でないと捉えられているのである。一方、(17b)の「ない」は、事象(山田が口を割る)を否定している。すなわち、(17b)では、「山田が口を割らない」ことが恩恵的であると捉えられているのである。例えば、(17a)は山田を取り調べた刑事の発話であり、(17b)は山田の共犯者の発話である。

ここで注意すべきは、寺村(1979)の分析のように、「～てくれない」の「ない」は「～てくれる」だけを否定しているとは分析したのでは、(17a)の意味を適切に捉えることはできないということである。なぜなら、寺村(1979)の分析に従えば、(17a)は、「山田が口を割る」ことが恩恵的でないと捉えられている、と解釈されてしまうからである。しかしながら、実際には、山田は「口を割る」のではなく、「口を割らない」のである。

第2に、次の例を考えてみよう。

(18) そう簡単に突破を許してくれない状況が多かった。

(『朝日新聞』2004.3.17.)(下線筆者)

(18)は、「簡単に突破を許さない」ことが恩恵的でないと捉えられている。この場合、「突破を許さない」ようにしたのは、認知主体の敵の選手であろう。では、(19)はどうであろうか。

(19) そう簡単に突破を許さないでくれる状況が多かった。

(19)では、「簡単に突破を許さない」ことが恩恵的であると捉えられている。この場合、「突破を許さない」ようにしたのは、認知主体の味方の選手であろう。

第3に、次の例を参照されたい。

(20) 瀬川は、[嫂が先方の電話番号を聞いてくれなかった]ことが残念だった。
(松本清張『草の印刻』)(下線筆者)

(20)では、認知主体の「瀬川」が「嫂が先方の電話番号を聞かなかった」ことを恩恵的でないと捉えている。では、(21)はどうであろうか。

(21)*瀬川は、[嫂が先方の電話番号を聞かないでくれた]ことが残念

だった。

(21)は不適格である。なぜなら、主節の述語「残念だ」が表す感情と「～ないでくれる」が表す恩恵性が、意味的に衝突してしまうからである。この点は、次の例の違いからも証明される。

(22)a. {ありがたいことに/残念なことに}、今日は雨が降ってくれない。

b. {ありがたいことに/残念なことに}、今日は雨が降らないでくれる。

(22a)は、「～てくれない」が文副詞「残念なことに」とは共起し得るが、「ありがたいことに」とは共起し得ないことを示している。一方、(22a)は、「～ないでくれる」が文副詞「ありがたいことに」とは共起し得るが、「残念なことに」とは共起し得ないことを示している。すなわち、(22a)は恩恵的でないと、(22b)は恩恵的であると、捉えられているのである。

第4に、「～ないでくれる」と「～てくれない」との複合形「～ないで(は)くれない」について考えてみよう。

(23) 泣かないでくれと言ったのに、花子は泣かないで(は)くれなかった。

寺村(1979)の分析に従えば、(23)は、「花子が泣かなかった」ことが恩恵的でないと捉えられている、と分析されてしまうことになる。この分析では、「～てくれない」の「ない」は、「～てくれる」だけを否定している点に注目されたい。一方、本稿の分析に従えば、(23)は、「花子が泣いた」ことが恩恵的でないと捉えられている、と分析されることになる。すなわち、この分析では、「～てくれない」の「ない」は、「～てくれる」だけでなく、「花子が泣かなかった」も否定していることになる。(23)では、「花子」は「泣かなかった」のではなく、「泣いた」のである。

以上、4点の例証から、観察Ⅰが得られる。

(24) 観察Ⅰ：「～てくれない」では、否定的事象が恩恵的でないと捉えられており、「～ないでくれる」では、否定的事象が恩恵的であると捉えられている。

観察Ⅰは、「～てくれない」の「ない」が表す否定性が、「～てくれる」に留まることなく、「～てくれる」が包み込む事象の内部にも浸透する事実を示している。すなわち、否定性の「浸透現象」が起こっている。

2. 「～てくれている」におけるアスペクト性の浸透現象

本節では、第1節で論じた「～てくれない」における「否定性の浸透現象」と平行した、「～てくれている」における「アスペクト性の浸透現象」について考察してみたい。

2.1. 先行研究における分析法

受益構文と「～ている」との関わりに関して分析した研究の一つに、高見・久野(2002)がある⁽⁴⁾。高見・久野(2002)は、「てくれている」と「ていてくれる」の違いに関して、次のような例を挙げて論じている。

(25) お金がまだ少し財布に{残ってくれていて/残っていてくれて}、
助かったよ。 (高見・久野 2002: 308)

高見・久野(2002)によれば、(25)では、「～てくれている」も「～ていてくれる」も適格であるが、「～ていてくれる」の方が適格性が高いとし、両者の違いに関して、次のように論じている。

(26) 「残ってくれていて」だと、「お金が残った」ことが話し手にとって好都合で、その状態が続いたことを表わし、「残っていてくれて」だと、「お金が残っていた」ことが話し手にとって好都合であったことを表わす。話し手は、財布にお金が残ったことよりも、財布にお金が残っていることのほうを好都合だと考えやすい。

高見・久野(2002: 308)は、さらに次の例を比較している((27b)における√は、適格であることを表している)。

(27)a. *お金がなくて困っていたところ、そばに千円札が落ちて
くれていて助かった。

b. √1(?)お金がなくて困っていたところ、そばに千円札が落
ちていてくれて助かった。 (高見・久野 2002:308)

高見・久野(2002)は、(27a)は不適格、(27b)はほぼ適格としている。この適格性の違いは、「千円札が落ちた」という事象が話し手にとって好都合であると考えるのは、私たちの社会常識から考えて不自然であるのに対し、「千円札が落ちていた」という事象が話し手にとって好都合であるような状況は、容易に想像され得るからであるという。

以上の点から、高見・久野(2002)では、「～ていてくれる」の「ている」は事象内の要素であるのに対し、「～てくれている」の「ている」は「～てくれる」だけに係る事象外の要素であると分析されていることになる。

2.2. 本稿における分析法

第1に、次の例を見られたい。

(28) 昨日から雨がずっと降ってくれている。

高見・久野(2002)の分析に従えば、(28)は、「雨がずっと降る」という事象が話し手にとって好都合である、と分析されることになる。この分析に基づけば、(28)における「ずっと」は、「降る」を修飾していることになるが、(29)が不自然であることから、この分析は妥当ではない。

したがって、(28)の「ずっと」は、(29)のように「降る」ではなく、(30)のように「降っている」を修飾していると分析されなければならないことになる。

(30)は、(28)における「～てくれている」の「ている」が、意味論的に見た場合、単に「～てくれる」だけを修飾のではなく、事象（「昨日から雨がずっと降る」）も修飾していることの証左である。このことは、(14)と平行して、以下のように表される(ASPは「～ている」を表す）。

第 2 に、次の例を比較されたい。

b.*おや、こんなところに木の実が落ちていてくれるぞ。

以上 2 点の論拠に基づき、本稿では、「～ていてくれる」と「～てくれている」の相違に関して、新たな分析法を提示する。

本節では、「～ていてくれる」と「～てくれている」の相違点を、6つの観点から例証してみたい。

(33) a. 胡蝶蘭は長い間咲いていてくれる。

(33a)は「胡蝶蘭」の「性質」を、(33b)は「胡蝶蘭」の「現象」を表していると解釈される。例えば、認知主体は、(33a)では、植物図鑑を見ながらその花の「性質」について述べており、(33b)では、目の前にあるその花を指して眼前の「現象」について述べている(「現象」の概念に関して

は、三尾 1948:83、Goldsmith and Woisetschlaeger 1982:81、Langacker 1991:264 参照)。「性質」か「現象」かという対立は、時間表現「長い間」の解釈の違いからも証明される。すなわち、(33a)の「長い間」は、「長い間咲く」というその花の「性質」に関わる時間を、(33b)の「長い間」は、開花時から発話時までに至るその花の開花時間が長いという「現象」に関わる時間を表している。次の例の違いも同様の観点から説明される。

(34) a.心臓は休みなく血液を循環させていてくれる。

b.心臓が休みなく血液を循環させてくれている。

(34a)は「心臓」そのものの「性質」(「機能」)を、(34b)は「心臓」の活動の「現象」を表していると解釈される。例えば、(34a)では、認知主体(例えば、医師)が「心臓」の「性質」について患者に説明しており、(34b)では、認知主体が、実際に「心臓」が「血液」を流している映像等を通して、その「現象」を観察している。

第2に、以下の例のaとbを比較されたい。

(35) a.花子がそばで微笑んでいてくれる。

b.花子がそばで微笑んでくれている。

(36) a.ヘルパーが祖父の面倒を見ていてくれる。

b.ヘルパーが祖父の面倒を見てくれている。

(35a)、(36a)は、「花子」、「ヘルパー」の「習性」(「習慣」)を表していると解釈される。一方、(35b)、(36b)は、認知主体の眼前の「現象」を表していると解釈される⁽⁶⁾。

第3に、次の例では、認知主体「瀬川」の眼前の「現象」が描写されているため、「～てくれている」が用いられている。

(37) 四谷署では警察官の姿が少なかった。退けた直後で、現に机の上を片付けている人間もある。

「平塚さんですか」

交通係の腕章を巻いた巡査が瀬川の言うのを聞いて、

「まだ、外回りから帰っていないんじゃないかな」

と呟き、捜査課らしい係のところに行き行って訊いてくれている。

その係は、カウンターのところに立っている瀬川を見て、その前に歩いてきた。(松本清張『草の印刻』)(下線筆者)

重要なことは、(37)では、「～てくれている」を「～ていてくれる」に置き換えると不適格になってしまうということである。

第4に、上の議論から、(i)現場性を表す知覚表現、(ii)現象の変化を表す副詞、などが用いられた場合には、「～ていてくれる」より、「～てくれている」のほうが自然であると予測されるが、以下の例からその予測は正しいことがわかる。

- (38) 魚を焼いて{*いてくれる/くれている}匂いにする。
 (39) 自分を応援して{*いてくれる/くれている}姿が見える。
 (40) だんだんと熱が下がって{*いてくれる/くれている}。
 (41) 徐々に雨が小降りになって{*いてくれる/くれている}。

さらに手元には以下のデータがある。

- (42) この日、右翼の守備位置で、大阪の友達が一塁側アルプス席に來ているのを見つけた。「がんばれ」と言っているのが聞こえた。試合中で、言葉を返せないのがもどかしかった。
 (『朝日新聞』1999.8.18.)(下線筆者)

(42)では、知覚表現「聞こえた」が用いられていることから、「～てくれる」を「～ていてくれる」に置き換えると不適格となる。

- (43)*「がんばれ」と言っているのが聞こえた。

第5に、次の例を考えてみよう。

- (44)??花子が校門で待っている予定だ。

(44)では、「予定だ」が用いられているので、事象がまだ成立していないことがわかる。よって、眼前の「現象」を表す場合に用いられる「～てくれている」は不自然である。では、次の例はどうであろうか。

- (45) 花子が校門で待っている{はずだ/に違いない}。

一見すると、(45)は本稿の分析の反例となるかのように思われる。なぜなら、(45)は、認知主体の眼前の「現象」を表してはいないのにもかかわらず、「～てくれている」が用いられているからである。しかし、(45)は反例とはなり得ない。なぜなら、(45)では、「花子が校門で待っている」ことが、あたかも眼前の「現象」であるかのように捉えられているからである。すなわち、「想像」というメンタルスペースの中で、「現象」が構築されているのである。このような「現象」の構築は、単なる未来の予定を表す表現である「予定だ」では不可能である。

第6に、次の命令文の例を比較してみよう。

- (46) a.校門で待ててくれ。
 b.*校門で待ってくれている。

(46a)は適格であるのに対し、(46b)は不適格である。では、なぜ「～てくれている」は不適格となるのであろうか。本稿の分析によれば、この理由は原理的に説明可能である。すなわち、命令文とは、事象がまだ「現象」として成立していない場合に用いられる文であり、既に成立している「現象」を表す「～てくれている」とは、共起しないのである。

以上6点の例証から、観察Ⅱが得られる。観察Ⅱは、観察Ⅰと平行している。

- (47) 観察Ⅱ：「～てくれている」では、眼前の「現象」を表す事象が

その場で恩恵的であると捉えられており、「～ていてくれる」では、「性質」・「習性」を表す事象が恩恵的であると捉えられている⁽⁶⁾。

観察Ⅱは、「～てくれている」の「ている」が表すアスペクト性が、「～てくれる」に留まることなく、「～てくれる」が包み込む事象の内部にも浸透する事実を示している。このように、「～ている」が事象の内部に浸透すると分析することによって、事象が「現象性」を帯びていることが説明されるのである。

3. 「浸透性の仮説」

観察Ⅰと観察Ⅱから、次の仮説が成立する。

(48) 浸透性の仮説: 「～てくれない」の「ない」が表す否定性、「～てくれている」の「ている」が表すアスペクト性は、「～てくれる」に留まることなく、「～てくれる」が包み込む事象の内部にも浸透する。

「浸透性の仮説」は次のスキーマで表すことができる (P は事象、V は「～てくれる」、NEG は「ない」、ASP は「～ている」を表している。また、点線矢印は、「否定性/アスペクト性」の方向性を表す)。

(49) [P] V NEG/ASP
 ↑ ↑
 └────────┘

4. まとめと今後の課題

本稿では、「～てくれる」構文と否定性・アスペクト性の関係について考察し、2つの観察を提示した。そして、これら2つの観察に基づき、「浸透性の仮説」を提出した。「浸透性の仮説」は、「～てくれない」の「ない」が表す否定性、「～てくれている」の「ている」が表すアスペクト性が、「～てくれる」に留まることなく、「～てくれる」が包み込む事象の内部にも浸透することを表している。

こうした「浸透現象」は、何から生じるのであろうか。ここでは、この「浸透現象」は、「～てくれる」が有する「透明性」(transparency) (Langacker 1999) の性質から生じると想定してみたい。「透明性」(transparency) とは、意味が希薄化し、高度に文法化した結果、主語に何ら選択制限を課さず、「主語統御性」(subject control) を失うに至った述語の性質のことである (Langacker 1999:159-162 参照)。すなわち、本動詞「くれる」から補助動詞「～てくれる」へと高度に文法化した結果、「～てくれる」は、認知主体の事象に対する恩恵的な心的態度を表し、主語との選択制限を持たない「透明な」述語となったので

ある。「～てくれる」が有するこのような「透明な」性質こそが、否定性・アスペクト性の「浸透」を許すものと考えられるが、より原理的な考察は他日を期したい⁽⁷⁾。

注

注 1 この点で、「出発する」のような「非継続動詞」と共に用いられた接続助詞「～まで」は、「否定極性項目」(NPI)として機能するといえる。

注 2 この違いは、次の例の適格性の違いからも証明される。

(i) a. 雨がちっとも降ってくれない。

b. ??雨がちっとも降ってほしくない。

(i a)は、事象(=雨が降る)が否定されているため、事象内に「ちっとも」を挿入することができるが、(i b)は、事象(=雨が降る)が否定されていないため、事象内に「ちっとも」を挿入すると不自然になる。

注 3 正確には、認識的な意味を表す動詞の中でも「認識性の強さの尺度の中間」の値を持つ動詞である(Horn 2001:324)。

注 4 「～てくれている」か「～ていてくれる」かの選択要因を、「継続」や「結果残存」等の「～ている」の意味の違いから説明している研究としては、山田(1997)を参照されたい。

注 5 「性質/習慣」か「現象」かの決定的な違いは、前者は、時間性を持たないのに対し、後者は、時間性を持つという点にある。その証拠に、「習慣」を表す(i a)は、「今」と共起しにくいのに対し、「現象」を表す(i b)は、「今」と自然に共起する。

(i) a. ??今、ヘルパーが祖父の面倒を見ていてくれる。

b. 今、ヘルパーが祖父の面倒を見てくれている。

注 6 ただし、「～ていてくれる」ではなく、「～ていてくれた」、「～ていてくれ」、「～ていてくれるはずだ」等の形式では、必ずしも、事象が「性質」、「習性」を表すとは限らない。

注 7 以下、「～てほしい」が否定性・アスペクト性の「浸透」を許すか否かについて考察しておきたい。本文の(8)、(10)及び、注 2 の(i b)で分析したように、「～てほしくない」の「ない」は、「～てほしい」だけに係り、事象には係らない。では、「～ている」に関してはどうか(「～てほしいている」というつながりはないため、「～てほしがっている」で考えてみることにする)。次の例を参照されたい。

(i) 子どもたちは過去の自分を分かってほしがっている。

(『朝日新聞』1999.9.07.)(下線筆者)

(i)では、「子供達が過去の自分を分かってっている」という内容が表されているとは分析できない。すなわち、「～てほしがっている」の「～て

いる」は「～てほしがる」だけに係っており、(ii)のように事象にも係っているのではない。

(ii) 子どもたちは過去の自分を分かっている。

以上の分析から、「～てほしい」(「～てほしがる」)は、(iii)に示されるように、否定性・アスペクト性を事象内へと「浸透」させる性質を有していないことがわかる((49)の図と比較されたい)。

(iii) [P] V NEG/ASP



「～てほしい」(「～てほしがる」)は主語との選択制限を有した「非透明性」述語である(「～てほしい」(「～てほしがる」)の主語は「有情物」に限られる)点を考慮に入れるならば、否定性・アスペクト性が事象(P)へと「浸透」していかない理由が自然に説明可能となる。

*本稿は、日本言語学会 2004 年度春季大会 (於:東京学芸大学) で発表した内容に加筆修正を施したものである。

参考文献

- Goldsmith, J. and E. Woisetschlaeger.(1982) "The Logic of the English Progressive." *Linguistic Inquiry*. 13 : 79-89.
- Horn , L.R.(2001) *A Natural History of Negation*. CSLI Publications.
- Langacker , R.(1991) *Foundation of Cognitive Grammar. vol. II*. Stanford:Stanford University Press.
- Langacker , R.(1999) "Losing Control : Grammaticization, Subjectification, and Transparency." In A. Blank and P. Koch.(eds.) *Historical Semantics and Cognition*. Berlin : Mouton de Gruyter.
- Masuoka , T.(1981) "Semantics of the Benefactive Constructions in Japanese." *Descriptive and Applied Linguistics*. vol.XIV. Tokyo: International Christian University.
- 三尾 砂 (1948)『国語法文章論』三省堂.
- 森田良行 (1989)『基礎日本語辞典』角川書店.
- 太田 朗 (1980)『否定の意味』大修館書店.
- 澤田 淳 (2003)「「～てくれる」構文の本質と認知主体」『国語学会 2003 年度秋季大会予稿集』17-24.
- 高見 健一・久野 暉 (2002)『日英語の自動詞構文』研究社.
- 寺村 秀夫 (1979)「ムードの形式と否定」『英語と日本語と 林英一教授還暦記念論文集』くろしお出版.
- 山田 敏弘 (1997)「「テイル」とベネファクティブ」『日本語教育』92:131-142.